

第三部

子どもを動かす9つの方法

—接し方ひとつで子どもは大きく伸びる！—

ハイパーラーニング名取教室 塾長 工藤 豪 著

「親はこうあるべきだ」という大それた話ではありません。「こうやったら伸びた」という、教育の成功事例を私の指導経験からお話しようと思っています。ご家庭でも簡単に実践できる内容です。早速ご紹介しましょう。

子どもを動かす行動その1

1. 期待を寄せる

どうすればやるようになるんだろう？

どうすれば、家でちゃんとやってきてくれるのだろう・・・。私は悩んでいました。

高校生の英単語です。高校で覚えなければならない英単語数は中学の比ではありません。近年、大学入試は文法問題が減り語彙問題が増えてきました。大学に現役合格するためには、早い時期からの単語の暗記は非常に重要で、最も力を入れて勉強しなければならない分野です。

ところが、これを学校や予備校ではあまりやりません。なぜなら、単語暗記は授業という形を取りにくいからです。単語暗記は先生を必要としません。本と CD があれば自分でできます。だから、せいぜい小テストを授業でやるくらいで、肝心の暗記作業は全て個人に委ねられます。

テストで管理すれば・・・

さて、この個人次第の単語暗記、生徒は家できちんとやるでしょうか。はい、その通り。全くやりません。受験学年になって少々焦りだしたら始める人は多いですが、1,2年のうちはよほど意識の高い人でない限りやりません。単語の暗記って単調ですものね。

でも、塾として結果を出させるには何としても単語はやらしてもらわないといけない。そのため私はまず単語テストを作りました。

最も有名な某単語帳の全 334 ページ、総計約 2500 行を全てタイプし、シャッフルして問題を出せる状態にしました。毎回、単語の小テストを実施すれば、やがて意識するようになるだろう、やってくれるようになるだろう、そう思ったのです。

しかし、結果はダメでした。少しは家で見てきたようですが、合格点の 9 割には程遠い結果でした。では、学校で実施している単語テストは、ちゃんとやってあるのだろうか？生徒に出来具合を聞くと同じようなものでした。期末テストならともかく、単語の小テストなんて、彼らにとっては道端に落ちている石ころ程度のものなのでしょう。

重要さを分かせよう

次に、単語の重要性を意識させるようにしました。大学入試センター試験 20 年間の過去問を見せて、近年、単語重視の傾向にあることをデータで示しました。「この問題も、これも、単語を知らなかったらどうにもならないよね」と同意を得るように説明しました。

生徒たちは単語の重要性を認識したようですが、結局アクションを起こすには至りませんでした。本人にとってみれば入試はまだ遠い先の話です。危機意識が低いのは当然かもしれません。

なんでやらないんだ！

それからは、毎回口うるさく言うようになりました。

「単語をやらなかったら、いくらここで文法を習ったって得点にはならない。君たちも単語の重要性は分かっているよね。なのにどうして家でやらないんだ。」

熱っぽく語ったあとの数日間は家でやった痕跡がありました。しかし、ほどなくまた元に戻りました。

こんなに重要なのにどうしてやってくれないんだろう。自分のことだと分かってないんじゃないかな。禁煙は、一度重い病気にかからないとなかなかできないというけれど…、それと同じだな。どうすればいいんだろう…。

計画表を作ってみた

学校や予備校と同じように、こちらでは授業のしやすい「文法解説」と「長文読解」のみにして、単語はやっぱり個人任せなのかなと投げ出しそうになったこともありました。

「単語は重要だから家でやっといてね」と言えたらどんなに楽かと考えました。しかし、成績を上げるという観点から考えると、単語暗記は絶対に避けて通れない道です。手遅れになる前になんとかやってもらわないと…。

次に**単語帳に張れるサイズの計画表を作りました。**単語を50個ずつに区切り、目標達成予定日時と実際の達成日を書き込める欄を設けました。

ただ、こんなものを作っても、根本的解決にはなっていません。案の定、予定を立てても3日坊主に終わっていました。これだけではいけない。何かプラスアルファが必要だ…。「必ずやってください」…いや、ダメだ。「自分のためですよ」…これもダメ。重要性は彼らも認識している。何かないか…う～ん…。

期待をかける

あるとき、ふと思いつきました。今までは、彼らが家で一生懸命勉強をやってきて、合格点を取ったら、彼らのことをほめよう、努力を認めようと思っていたけれど、**先に認めたらどうなんだ？**

今までは「なんでやらないんだ！」と注意、叱責していた。今度はその逆を行って見たら？つまり**期待をかけるんだ。こちらが相手を信じていることを知らせてやるのだ。**

「君たちならやれるよね」とか…いや、ちょっと軽いな。

「君ならきっとできる！」は？…ありきたりだな。真面目にいこう。

「きっとできると信じています。」…うん、これだ。真剣な感じが出ていていいな。

このメッセージを計画表に載せ、本に貼ってもらいました。するとそれからは、**それまでとは打って変わって別人のようにやってくるようになりました。**テストの結果が全てを物語っています。たった一言の言葉を追加しただけなのに、一体なんだ、この変わりようは！ たまに怠けることもありますが、その都度**「信じているから」と付け加えるとまたやってくるようになりました。**

期待に応えようとする

この言葉は、中学生に復習問題を解かせるときも役に立ちました。私はよく「これは先週やったところだ。難しいけどできるかな〜。」とハラハラドキドキ感を演出します。これはこれで解けたときの感動が大きいので、使えるセリフではあります。

しかし解けなかった人の一部に「どうせ私にはできないわ」と、あきらめの意識を芽生えさせることもありました。

ところが今度のセリフ、「きっとできると信じているよ。」は、解けなかった人の意識を変えました。ほとんどの人が、私の期待と信頼にこたえようと、次回までに必死になって家で復習してくるようになったのです。

それからは、宿題をやってこない生徒にも、「今度は必ずやってこいよ！」とは言わず、「次回はきっとやってくると信じているよ。」と目を見て言うようにしました。100%とは行きませんが、この言葉によってやってくる率は高くなりました。

なにより、やってなかったときの反応が違います。「今週は部活が忙しかったから」などと、何かのせいにすることはほとんどありません。責任を自分に帰しています。せっかく期待していただいたのに裏切ってしまうと申し訳ないという表情を浮かべています。

これは私にとって大きな気付きでした。大きな期待は逆にプレッシャーを生むのかも分かりませんが、小さくさらっと、しかし真剣な表情で「きっとできると信じています」というと、人はその期待に応えようとがんばるようになるのです。

子どもを動かす行動その2

2. 成功をイメージさせる

私は、学力が中レベル以上の生徒に、よく一高などのトップクラスの学校の話をしてします。

自分の知っている情報はもとより、高校生の生徒から聞いた最近の学校の様子、生活、学業、イベントなど、折に触れて話すようにしています。なぜそうするかというと、もちろん生徒の成績を伸ばすためです。

イメージが自分自身を作る

あの学校は無理だ、高嶺の花だ、自分には到底届かないと言う人がいます。しかし、その人はその学校についていったいどの位知っているのでしょうか。

理由を聞くと「〇〇君が受けるって言うんだから自分には無理」とか「だってレベル高いじゃん」とかそんな程度です。結局、**高いイメージを崩せないでいるだけなのです。**

プロテニスプレーヤーは、世界ランク 200 位ぐらいまでは実力的にはほぼ互角で、違いはメンタル部分にあるという話を聞いたことがあります。トップクラスの試合はメンタルで勝敗が決するとのこと。ここでいうメンタルとは、ハイレベルな自分、勝利する自分を鮮明にイメージできるかどうかということです。

京セラの稲盛和夫さんや、ワタミの渡邊美樹さんのような名経営者も同じことを語っていました。「**成功したときの状態をはっきりイメージできれば必ず成功する**」と。逆に「成功できないのは、はっきりとイメージできていないからだ」とも語っています。

また、ある実験では、小学生を全力で走らせてタイムを計ったあとに、今度は「自分はもっと速く走れる」とイメージさせてから走らせたところ、さきほどよりタイムが大幅に縮まったという話もあります。

東大見学ツアー

たとえ高い目標でも、そこを強くイメージさせてやることができれば、生徒は「自分にもひょっとしたら手が届くかもしれない」と考えるようになり、やがて「そこへ行きたい」、「行くために努力しよう」と考えるようになります。

近年、東大合格者の中に、地方の公立トップ高出身者が増えてきたというデータがあります。どうして地方の公立高校が躍進してきたのか学校側に尋ねると、学校は東大見学ツアーを組んだこと、それによって**受験生が東大を強くイメージできるようになったことが大きい**と答えました。やはり「イメージ」です。勉強がどうだとかいう話ではありません。

お金持ちじゃないとダメですか？

東大といえば、最近、東大生の親は高所得者が多いという報道がありました。学力格差と所得格差が比例し、階層の固定化が懸念されるというものです。

理由としては、所得の多いところは教育費に回せるお金が多いからと報じられていました。遺伝子という人もいました。しかし、私の考えは全く異なります。

教育費よりももっと大事なことがあります。それはもちろん「イメージ」です。

私が思うに、高収入の方はそれなりの職業や地位にいますので、入ってくる情報もお付き合いしている方々もハイレベルです。そういった話を家庭で子どもに話す。するとその子どもは、一般庶民には夢のまた夢のことがらも自分の身辺のことと捉えられる。これが大きいのです。東大に入ることや医師や教授になることがその子には普通に思えるのです。

「あなたは成功できる」ということを、親が自信を持って子に伝える。その結果、子は自らが飛躍できるイメージを持てるようになる。そうやって、子どもは伸びていくのだと思います。

子どもを動かす行動その3

3. 結果で判断し、過程をほめる

力がついたかどうかを確認するため、塾ではたびたび復習テストを行います。ちゃんとやってきたかを尋ねると、やった人、やってない人さまざまいます。

結果<過程と思っていた

「なに～、やってないだお！」

以前の私は、怠けている生徒には喝を入れていました。勉強は復習が命です。復習を怠るとはなんたることか。テストに合格しようがしまいが、その歪んだ精神を真っ先に叩き直し、勉強とはどういうことか、再度教育してやる！と息巻いていました。

逆に結果が良くても、勉強をしたあとがなければダメだ。たまたま運が良かっただけなのかもしれないし、サボっていたら、いずれ他人に抜かされる。そう考えていました。

一方、結果が悪くても、普段コツコツがんばっている人なら、その努力を認めていました。がんばっていれば結果は必ずついてくる。そう信じて、そこまでのその人の努力を評価していたのです。

過程が見えない

しかし、あるときから考え方が変わりました。それは英語の音読を家庭学習にしたときのことです。音読は大変効果のある勉強なのですが、それについては置いておきます。

さて、教科書 2 ページ分の音読を宿題に出したはいいものの、やったかどうかどうやって調べようか。他の宿題のようにノート提出というわけにはいきません。生徒に、家で音読をやっているかと聞くと、大半は苦笑いを浮かべながらやったような、やってないような、微妙な顔つきになります。

そこで一計を講じました。音読テストをすることにしました。ただのテストではなく制限時間内に読み終えないといけないというルールにしました。こうすれば、時間内に収まるように練習してくれるだろうと考えたのです。

テストの結果、家でやってきていない人はやはり制限時間内に読み終わらず、不合格になりました。しかし再テストでは、それまでに家でかなり練習をしてきょうで、初回とは比べ物にならないくらい上手になっていました。**証明するものは何もありませんが、厳しい制限時間をくぐり抜けたという結果を見れば、家で練習してきたことは明白でした。**

結果を粛々と見る

今まで、結果は悪くても、普段コツコツがんばっていたなら、そのがんばりを認めていたところがありました。しかし、今は**それでは甘いと思っています**（よっぽど学力の低い子や小学生低学年を除く）。基準を突破するためには、その努力で足りないのなら、もっとやらないといけません。

そもそも、陰の努力や過程というのは、本当のところは他人には分からないのです。ずっと一緒に生活しているわけではありませんから。たくさんやったと言っている人が実はあまりやっていなかったり、努力のあとが見えない人が実はやっていたりするのです。

したがって、私は次第に過程よりも結果を重んじて見るようになりました。ひとつだけ注意点があります。それは結果についてくどくど説明せず、粛々と見ることです。

タイムオーバーの生徒は「えっ！家でいっぱい練習してきたのに」と悔しがりますが、それにはあまり付き合いません。「あと 5 秒。残念だったな。」とさらりとやる。そうすれば、次回までにまた必ずやってきます。

一方、練習を怠けていた生徒が、運よくテストに合格したらどう評価すればいいのか。

私は、それはそれでいいと思っています。「勉強の習慣をつけるように指導しないとダメだ」と言われるかもしれませんが、こういう生徒は能力が高く、一瞬の集中力で量をカバーしているのです。その後、持ち前の集中力をもってしても解決できない問題に出会ったら（というか必ず出会うことにはなりますが）、そのとき必ず練習量は多くなります。結果重視で来たからこそ、ダメだったときにアクションを起こせるようになるのです。

結果>過程でいい

まとめるとこういうことです。

- ① 家で全くやらず、成績は悪い ⇒改善が必要です
- ② 家でよくやり、成績がいい ⇒文句なし！
- ③ 家でよくやるが成績が悪い ⇒結果が出ていないので改善が必要です。
- ④ 家で全くやらないが成績はいい ⇒OK とします。（テストが簡単なだけです）

また、気をつけたいのは、**成績が悪かったときに「ほらね、やってないからこうなる」などとは言わないことです。**それを言うと本人は反発し、一層やらなくなります。成績が悪かったなら淡々と再テストに進めばいいのです。

テストに受かった人や得点が良かった人には、「はい、合格。がんばったな」と言います。**がんばってなくてもこう言います。**一方、ダメだったときは「う～ん、残念だったね」とあっさり済まします。そして、再テストや補習プリントに淡々と進ませます。「やらないからだよ」とか「もっとやらないと」など余計なことは言いません。

結果をよくするためにがんばるようになる

追試でも良い結果が得られない日々を過ごすと、子どもはどうしたら良い結果が出るのか真剣に考えるようになります。そして合格を目指して、同じところを真剣に復習し、自然と過程がよくなってきます。量を増やし、工夫して勉強するようになります。

それこそ**私が待ち望んだ瞬間**です。私は、その**良くなった過程をここぞとばかりにほめます。**

「お、赤ペンで何か書いているね。しっかりやってるんだね。」
生徒はちゃんと自分を見てくれていることに気を良くし、ますますやるようになります。

子どもを動かす行動その4

4. 感動する

酔っているところを見せる

「ここをいきなり計算せず、保留して、こうやってこうやってこうやると…ほら！あっという間に答が出るんだ。いや～、深いね～。数学って、なんて美しいんだろう…。」

ため息とともに軽く首を横に振ります。完全にヒタっています。断っておきますが、別に私はナルシストではありません。感動を演出しているんです。

「こうやって解くと早いんだ。覚えておくように。」というのと比べてみてください。頭に染み込む度合いがまるで違うと思います。

感動は、感じて動くと書きます。これはまさに子どもを動かす代表行動の一つでしょう。「私もそれができるようになって、その気持ちを味わいたい」となれば最高です。

今のは、自分で自分にウツトリするパターンでしたが、最も多いのは子どものやったことに感動するパターンです。

うれしさ爆発

「ほ～、実力試験、もう復習したの？すごいなあ。なかなかできないよなあ。普通、テスト後は遊んじゃうよね。」子どもの行為をほめつつ、自らは感動に震えるようにします。

「これ、よく解けたなあ！2回目ぐらいでは絶対できないと思っていたけど…、家でよくやってくれたんだな…。いや～うれしいなあ。」最近は目にうっすらと涙を浮かべることができるようになりました。

「ああ、先生は自分の努力に涙を浮かべてこんなに感動してくれている。またがんばって先生を幸せな気持ちにさせてやろう。」こう思ってさらに努力してくれるのを狙っています。

「感動する」ことのほかに「感動させる」というのもまた大事です。最近、職業を疑似体験できる施設が流行っていますが、感動させるには本物に触れさせることが一番だと思います。そういう意味では読書もいいですね。伝記は特に良いと思います。成功をイメージさせやすくします。

子どもを動かす行動その5

5. 頭を使わせる

間違いを指摘せずぼかす

「先生、これ、どこが間違ってるんですか？」

自分で計算のミスが発見できないでいる生徒に聞かれると、私は決まってこう答えます。

「う～ん、この辺までは合ってるな。」

「この辺」というのは、ミスの直前の行だったり、3行ほど手前だったりします。極力ダイレクトに指摘しないように気をつけています。別に意地悪しているわけではありません。

(注：よほど学力の低い生徒にはもちろんダイレクトに教えます。)

「先生ここまで当たってますか？」

今度は英語の発音の○×問題（全10問）です。もし間違いの個所にバツをつけたら、とっとと逆の答を書かれておしまいです。

「この4つの中で1つ間違いがあるな。」

私は少し広い範囲を示し、敢えて間違いの箇所をぼかしました。

頭を使って欲しいから

「どうしてそんなことするの？」と思われるかもしれませんが、しかし、こうしないと**頭を使ってくれなくなります。**

成績が上がらない一番の原因は、頭を使わないことです。

もし、先ほどの例で間違いをダイレクトに指摘していたら、彼らは全く頭を使わず、さっさと手直ししていたでしょう。しかし少しぼかしてやれば、どこに間違いがあるのか一つ一つ慎重に確かめることになります。

私はこの本能的な性質を利用して、頭をフル回転させることを狙っています。

脳ミソは普段あまり使っていないと、どんどんサビついてきます。ご家庭におきまして、何かを教えるときに、全てを教えず、相手に考えさせるようにしてください。「どう言えばこの子が頭を使うようになるかしら？」という視点で、接するのがポイントです。

子どもを動かす行動その6

6. 競争心を起こさせる

他人よりも優れたい

授業で、みんなに数学の難しい問題をやらしてもらいました。しかし、難しいという固定観念があるためか、ペンは思うようにはかどりません。今ひとつ集中しきれていないと見た私は少し大きな声でみんなに聞こえるように言いました。

「おお、〇〇君、そこまではいいぞ！あと少しだ！」

これには生徒をほめる意味と、周りの競争心をあおる意味があります。

「よし、1人OK！…2人正解！4人当たったらやめよう。あと2人！ほらがんばれ！」すると、みな背筋をピンと伸ばし真剣な目つきで問題に取り組みだしました。みんな、その2人には俺が入る！と言わんばかりの勢いです。私は、他人よりも優れたいという競争心を利用したわけですが、たった一つの言葉でこうも変わるんですね。

ライバルがいない場合は？

一方、個別指導の場合は、他人と競争できる環境にはありません。しかし、それでも子どもの集中力を瞬時にアップさせる技はあります。

ライバルの代わりに「時間」を使うのです。私の塾ではキッチンタイマーを各机に用意しています。「なんか今日は集中力が足りないな」と思ったら、この秘密兵器の出番です。

「はい、じゃこれを解いてみよう。2分でできないといけないな。では…」

と言って、生徒の目の前でおもむろにタイマーをセットします。生徒はカウントダウンされるデジタル表示を気にしながら、ものすごい集中力で問題を解きにかかります。たった一個のタイマーが、人の能力をここまで引き出すんですね。

ただ、やりすぎはいけません。多用すると、それに慣れて焦らなくなります。

子どもを動かす行動その7

7. 笑顔を見せる

子どもの勉強の話になると、眉間にしわを寄せたり、不安いっぱい表情になったりするお母さん、お父さんがおられます。わが子の初めての受験。毎日やってるのかな、どうなのかな。不安なお気持ちになるのは大変良く分かります。

しかし子どもを伸ばすためには、不安を表に出すことは最もやってはいけない行為です。子どもを伸ばす方法として、期待をかける、感動するなど書きましたが、いくらそのようにしても表情が曇っていたら通じるものも通じません。

子どもと成績や進学の話をするとき、無意識に不安が顔に出ていませんか。子どもはそれを敏感に感じ取ります。そして親が不安な気持ちだとわかると、心の拠り所がなくなり、自分も不安になってきます。

成長をとめるもの

不安は成長を阻害します。不安な気持ちでいると「これで合ってるかな、自信ないな」「自分にはできるかな」と、一步踏み出す前に歩みをとめてしまうことになります。歩みをやめれば当然成長はありません。

自信のある人は「これで合っているはずだ。これで間違っていたら解答がおかしい。」「自分にはできるはずだ」と、未知の領域にも力強く踏み出します。たとえ振り返りにあっても、そこを徹底復習してやがて自分のものにし、また新たな一步を踏み出します。こうやって成長のサイクルに入ります。

落ち込む人に笑顔で接する

「先生…、実力試験が返されました…」刑を言い渡された被告人のような顔で、テストの結果を報告しに来る生徒がいます。

「ああ、何点だった？」良いか悪いかは様子から大体察しがつきますが、私はあえて鈍感を装って尋ねます。

「ひど過ぎて…ダメです。」予想通り、生徒は暗い顔で答えますが、ここでこちらもつられて顔をしかめてしまってはダメです。「一体何点だったの…」と不安になる気持ちをグッとこらえて、「そうか、まあ、しっかり復習して次に期待だな」と笑顔で軽く返します。

この生徒にとっていま最も大切なのは、落ち込みグセの矯正です。不安を取り除いてやることです。勉強についてのアドバイスは二の次。**テストの得点を正面から見つめられるようにすることが先決です。**

そのためには笑顔で接するのが一番です。テストの点なんて気にしないでいいんだ。一番重要なのはテスト後の復習だ。さ、勉強、勉強！と明るく対応するのがベストです。

ただし、お調子屋さんやのんびり屋さんは逆です。口に手を当て、深刻な顔で「こ、これは…た、大変なコトになる！」と不安感をあおります。焦らせて、心に火をつけるのが目的です。

子どもを動かす行動その8

8. 激励する

行けるところがない？

ある大手の塾から私の塾に移ってきた中1の生徒のお母さんと、初回の面談をしていたときのこと。子どもさんの成績を尋ねたところ、お母さんは心配そうな表情でこうおっしゃいました。

「向こうの塾が言うには、**ウチの子はこのままでは行けるところがない**らしいです…。」

隣に座っている生徒も浮かない顔をしています。それから2週間の体験授業を経て、再度の面談で私は言いました。

「**このままちゃんとやっていったら二女高にも行けますよ。**」

出まかせではありません

私の話を聞いて、お母さんと子どもは表情がパッと明るくなりました。本当のところを言うと、私は預言者ではありませんので、まだ何も習っていない中1の春で、しかもたった2週間の体験で、そこまで分かることはありません。

じゃあ、出まかせを言ったのかということも少し違います。その生徒は計算の基本ができており、解くスピードも速かった。だから三女高ぐらいは堅いというのはありました。あとは、本人が塾のカリキュラムや宿題をきちんとやって、上を本気で目指せば、二女もありうるという意味で言ったのです。

激励しましょう

そして、何より励ましたかった。まだ中1の春です。可能性は未知数です。なのに、さきほどの親子は「行けるところがない」などと言われて不安そうになっている。

靈感商法のように、相手を不安にさせるのがその塾のマニュアルなんですか。**不安にさせるより、激励する方が人は動くようになるのに。**ちなみにこの生徒、3年後、無事に二女高に合格しました。

私は授業でよくトップ校の話題を出します。そして、「行けるぞ！行ける！簡単だ！宮城の学校なんてどこもたいしたことはない。要は気持ちだ！」と生徒を励まします。**錯覚させるぐらい言って構わない**と思っています。難しい問題を解いた生徒には「よくやった。これは〇〇高校を受ける人のトップクラスでも、そうは当たらないだろう。」と励まし、やる気を鼓舞させます。これは思いのほか効き目があります。

子どもを動かす行動その9

9. 大局観を示す

塾をやっている一番うれしい瞬間

生徒の成績が上がったことよりも、生徒が志望校に合格を決めた時よりもうれしいこと。それは生徒が卒業して数年たってからいただく言葉です。

「あのとき、先生にああ言ってもらってよかった」

「ああ言ってもらわなかったら今の私はなかった（うちの子はこうなっていなかった）」

という言葉。エラそうにしてすいません。もっとも、過去に数えるほどしかないですけどね。

Oさんは、トップ高に入れる力がありましたが、中堅レベルの学校を志望していました。理由を聞くと、

- ・志望先をトップ校にしないのは、入っても勉強についていけない気がするから。
- ・中堅レベルの学校は、雰囲気良さそうだったから。

ということでした。ちなみに、お母さんは、「上を狙えるんだったら上にしてほしい。将来の可能性が広がるから」という意見をお持ちでした。

上を狙う2つの理由

私は上を狙う理由としていつも2つのことを生徒に話します。

一つは、Oさんのお母さんがおっしゃるように「将来の可能性が広がる」から。もっと具体的には「職業選択の幅が広がるから」ということです。

もう一つの理由は、「友人がハイレベルだと、パワーをもらえるから」ということです。自分がくじけそうになったり弱気になったりしたとき、各界でがんばっている友人がいると、これではいけないという気持ちが自然と湧いてきます。友人からエネルギーをもらえます。

高いところを目指す理由を、単に偏差値が上だからという理由で片づけてしまっただけでは、生徒もやる気が上がってきません。表面的なことではなく、本質的な部分を語る。大局的見地にたって物事を教える、導く。これが大切だと思います。

一つだけ注意していることがあります。それは、私個人の考えを述べ理解を得るように努めはしますが、押し付けはしないということです。先ほどの上を狙う2つの理由も、あくまで私個人の考えなので、同意できないということであればそれは構わないと思います。判断するのはあくまで相手です。

Oさんは、結局半年かかって私の考え方に賛同し、無事トップ校合格。その後国立大農学部に入学しました。ある日、お母さんと塾にお見えになって、お母さんともども感謝されました。「もし先生に言われなかったら、もし志望校が最初のところだったら、今はありません。」

第3部まとめ 子どもを動かす9つの方法とポイント集

1. 期待を寄せる…「きっとできると信じています」と言う
2. 成功をイメージさせる…成功事例や情報を提供する。「あなたにもできる」と言う。
3. 結果で判断し、過程をほめる…結果重視。また過程にも気を配り良いところはほめる。
4. 感動する…他人や相手の成功に感動する。伝記を読ませて感動させる。
5. 頭を使わせる…間違いを指摘せずぼかす。考えさせる。
6. 競争心を起こさせる…他人よりも優れたいという気持ちを利用する。タイムを計る。
7. 笑顔を見せる…笑顔でドシンと構え、子どもの支えになる。
8. 激励する…落ち込まないように励ます。「自分はできる人間」と錯覚させる。
9. 大局観を示す…木の葉や枝の部分ではなく、幹の部分を示してやる。